

(別紙1)

尼崎市支え合いを育む人づくり支援事業 教育・研究活動事業実績報告書

教育・研究活動名	地域コミュニティづくり—高校生にできること「防災・減災 災害時要配慮者の支援を中心に共助の取り組み」「在宅療養・看取りの地域啓発活動」「子どもの居場所作り」の3つの取り組み			
申請大学・高校等名	大学及び高校等名	兵庫県立尼崎小田高等学校		
	活動グループ名	看護医療「あまおだかんご」	参加学生等人数	31人
指導責任者名及び連絡先	学部・学科等名称	普通科 看護医療・健康類型		
	責任者氏名	福田秀志	連絡先電話番号	
	E-mail			
協働する市民活動団体及び代表者名	団体名	小田地区民生児童委員協議会、		
	代表者氏名	西村 由美子	連絡先電話番号	
	E-mail			
教育・研究活動目標	ア:災害時要配慮者の支援について高校生ができることを模索していく。(災害時要配慮者についての市民啓発。福祉避難所の指定施設を増やす取り組み。イベントの実施)イ:在宅療養について市役所、尼崎医療・介護連携協議会と協働し、「看取り」について市民の啓発していく。ウ:子どもが喜びほっとする居場所づくりに向けての研究と子ども向けイベントの実施。			
活動内容及び実績、評価	別紙を参照 自治会内の高齢者の方の避難訓練の誘導、協働の避難訓練などを行うことを考えていたがコロナ禍でできずに終わった。しかし、小田南生涯学習プラザにおいて、おだ夏祭り、あまおだ減災フェス、高齢者イベント、在宅療養ワークショップを実施した。また、子ども食堂への募金活動、子ども食堂でのイベントの実施、アミング潮江商店街での子ども向けお菓子作りなども尼崎市内の会場で行った。地域コミュニティづくりに貢献できたのではないかと思います。			

※ 報告書の内容及び掲載写真は、市報、HP等の市の発行する媒体への掲載される場合がありますので、事前に学生等の同意を得た上で、提出をお願いします。

防災・減災

【活動内容・実績】

今年度の「防災・減災」の取り組み内容

ア：「尼崎市要支援者 見守り・支え合い事業」（本校と尼崎市との協定の事業）の実施。尼崎市の避難行動要支援者名簿に登録されている65歳以上の高齢者の自宅を訪問し、孤立しがちな高齢者と私たちが日頃から顔の見える関係づくりを行うことを目的とする。（2021年10月以降実施。1月14日、最終実施）学校近隣の自治会区域に居住されている要支援者の自宅を民生・児童委員と訪問する。

イ：第4回あまおた減災フェスの開催（2021. 11. 7） 尼崎小田高校が地域防災活動の「HUB」となり、地域の人と防災・減災について考える時間を共有し、地域の防災力向上を目指す。はじめて学校の外に出て開催しました。人と人がつながることの大切さ、防災・減災についての知識・技術を学べる良い機会になった。

【午前】

・BLOOM WORKS(神戸発・防災音楽ユニット) と高校生と大学生がトークショー

・「ちずあそび」エリア地図をもとに、定められたチェックポイントの合計得点や地域貢献ポイントをゲットしながら、まちを楽しむゲーム。参加費 2000 円、1000 円は地元商店街の食事券として還元。また1等～5等まで商店街の商品券を贈呈。

【午後】

・「防災・減災イベント」・・・県下の中高大学生などが防災食、防災グッズ作りワークショップなど子どもから大人まで楽しめる出し物を出展。本類型はライフラインが止まった際に役立つ「ソーラークッカー」を作成した。

・「BLOOM WORKS ライブ」・・・高校生と大学生との合唱コラボ合唱。

ウ：小学校への防災出前授業において、阪神・淡路大震災の被災体験を継承し、高校生が小学生に語り継ぐ（2021. 12. 21）

段ボールベッドやトイレの使い方、毛布担架や三角巾の使い方の講習だけではなく、阪神、淡路大震災の被災体験を、私たち被災経験のない高校生が、被災者から聞き、小学生に語り継ぐということ初めて実施。また、避難行動要支援者名簿の存在を知らないおじいちゃん・おばあちゃんのために、「孫として君たちがおじいちゃん、おばあちゃん」に伝えてほしいということを依頼。

エ：学んだこと・自分たちの活動を多くの人に「伝える」

学んだこと・自分たちの活動を多くの人に伝えた。12月24日にFM尼崎に出演し、この1年間の活動を訴えた。甲南大学主催のリサーチフェスタや京都大学での高大連携事業、成良中学校でのユネスコセミナーや小田地域課主催のSDGs INODAなどで報告。私たちの活動を多くの人に伝え、地域コミュニティの大切さを伝えた。

オ：阪神・淡路大震災を忘れない 21世紀を担う私たちの使命 ひょうごユース防災・減災ワークショップ（舞子高校環境防災学科と）

1月14日には、阪神淡路大震災をきっかけに創設された環境防災科がある舞子高校に行き、私たちの活動を他校の生徒に伝え、それぞれの高校の取り組みの交流をした。午後は、「災害発生後からの対応～タテ割り意識の見直しと若手人材の育成」



というテーマでワークショップを行いました。市役所の職員になったと仮定し、災害発生後の各部署の課題と解決策を話し合いを実施
力：災害時要配慮者について、自助・互近所・共助の大切さを伝える劇を市民に上演。（2022.1.23）



過去2回、「災害時要配慮者」の方が避難時、避難所においてどういう困難を抱えておられるのかを、高齢者編、知的障がい者編、発達障がい者編、身体障がい者編、聴覚障がい者編の劇を作成し、伝えてきた。今年度は「妊婦・乳幼児」が避難時、避難所においてどういう困難を抱えているのかを上演。産後のお母さんとあかちゃんも病気でも障がいを持っているわけでもなく、多くの人は配慮が必要だと思っていないが、災害時には多くの苦悩と困難があるということ啓発。

【想定していた活動成果に対する達成度合い（達成できたこと、できなかったこと等）、学生等が関わった地域、団体の活動の変化等・学生等の学習意欲、地域に対する考え方の変化等】



自助、共助、互近助の意識が地域住民に拡がり、平素から人と人とが繋がりが、安心・安全な街づくりに繋がっている。

高校生と高齢者の顔の見える関係づくりを行うことで「地域コミュニティづくり」の大切さが自治会に拡がりつつある。いざという時に、高校生が高齢者を支援できる可能性が出てきた。

小学生が災害への備えを学び、保護者に伝えることで、防災意識が高まる。その子どもが大人になることで防災意識が継続されることが期待される。地域住民の学びが「防災・福祉」の街づくりに繋がっていく。

「災害時要配慮者」のことで知り、平素から災害時要配慮者のことを考え、災害時に支援しようという住民が増える可能性がある。

あまおだ減災フェスが、防災・減災について定期的に考えるきっかけになっている。防災意識が向上することで互近所同士の助け合いにつながっている。「つながる」きっかけになっている。

防災・減災の取り組みを通して、「在宅療養班」「子どもの居場所班」が「地域コミュニティづくり」に取り組み、相乗効果が出てきた。

在宅療養・看取り

【活動内容・実績】

今年度は、10月30日（土）に小田南生涯学習プラザにて「高校生企画!!! みんなで楽しく健康に」のイベントを実施した。以下を目標にいて取り組んだ。

●コロナ禍で外に出る機会が少なくなっている高齢者に「コミュニケーションの場」を提供する。●私たちと一緒に高齢者の方に体を動かす楽しさを感じてもらい、ひとりでもできる運動方法を身につけることでフレイル予防に繋げる。●地域で活動しているグループやふれあいサロンの情報を掲示し、コロナ禍であっても新たな趣味や交流の場を見つけられる機会をつくる。その内容は、フレイル予防体操（医師監修で作成した体操）、お手玉ホワイトボード、的当て、スポーツスタッキング、小田地区ふれあいサロン実施場所マップを作成。

例年通り、「病院から在宅へー在宅療養・看取りを地域社会・在宅で」「尼崎市介護・医療連携協議会」（尼崎市包括支援担当が事務局）の医療・福祉の専門職から「高齢社会の現状」「地域包括ケアシステム」「多職種連携の大切さ」を学ぶことを通して、「医療や介護が必要になっても、住み慣れた地域・自宅で、最期まで自分らしい生

尼崎小田高校
在宅療養
ワークショップ

～最期まで自分らしく在宅で地域で暮らすために～

開催日 令和4年2月5日（土） 9:30～11:30

場所 尼崎市立小田南生涯学習プラザ
（尼崎市長洲中道1丁目6番10号）JR尼崎駅南口より東へ徒歩5分

対象者 どなたでも（お申し込み不要）

プログラム

- 受付開始 (9:00～)
- 開会行事 (9:30～9:45)
- フレイル予防体操 (9:45～9:50)
- 劇 ACP アドバンス・ケア・プランニング
～一人一人が自分らしく～ (9:50～10:20)
- 休憩 (10:20～10:30)
- 「もしバズゲーム」自分の最期について考える (10:30～11:15)
- 「尼崎市医療・介護連携協議会」からのまとめ、閉会行事 (11:15～11:30)

主催：兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康開発（2年生）
共催：尼崎市 総合政策課 小田地域課
後援：尼崎市 尼崎市医師会 介護連携協議会（事務局：尼崎市健康福祉局 包括支援担当）
（連絡先）兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康開発部長 堀田秀志（尼崎市長洲中道2-17-46）
TEL:06-6488-5335 FAX:06-6488-5337 M-J:tsukuda_hideshi@hyogo-c.ed.jp

尼崎小田高校
在宅療養
ワークショップ

～最期まで自分らしく在宅で地域で暮らすために～

開催日 令和4年3月5日（土） 9:30～11:30

場所 尼崎市立大庄北生涯学習プラザ
（尼崎市大島3丁目9-25）

対象者 どなたでも（お申し込み不要）

プログラム

- 受付開始 (9:00～)
- 開会行事 (9:30～9:45)
- フレイル予防体操 (9:45～9:50)
- 劇 ACP アドバンス・ケア・プランニング
～一人一人が自分らしく～ (9:50～10:20)
- 休憩 (10:20～10:30)
- 「もしバズゲーム」自分の最期について考える (10:30～11:15)
- 「尼崎市医療・介護連携協議会」からのまとめ、閉会行事 (11:15～11:30)

主催：兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康開発（2年生）
共催：尼崎市 総合政策課 大庄地域課
後援：尼崎市 尼崎市医師会 介護連携協議会（事務局：尼崎市健康福祉局 包括支援担当）
（連絡先）兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康開発部長 堀田秀志（尼崎市長洲中道2-17-46）
TEL:06-6488-5335 FAX:06-6488-5337 M-J:tsukuda_hideshi@hyogo-c.ed.jp

活を送ることができるということ」を地域住民に伝えることを目的に、実施。「住み慣れた地域・自宅で、最期まで自分らしい生活を送ることができるということ」についてはシナリオを作成し、劇を通して地域住民に伝えた。また、勝谷先生に助言を得て「フレイル予防体操」を作成。「応用生徒報告会」(R4. 1. 23)と「在宅療養ワークショップ」(R4. 2. 5) (R4. 3. 5) を実施。

【劇のシナリオの一部】

ナレーター：在宅医（ひびき）の提案により、おじいちゃんに、入院による生活管理とリ

ハビリを進めていくのか、その上で「もしもの時にどのような治療を選択していくのか」ということについて家族と専門職を交えて話し合おうということになりました。

娘（いちか）：救急車で倒れて入院した時、家で過ごしたいというおじいちゃんの強い意思で在宅療養をはじめたわけやから、おじいちゃんのことをやはり尊重しないとかわいそうやで。残り少ない人生やし、2人で同じ家で暮らしたいって、おばあちゃん、いったやんか。

おばあちゃん（みお）：いちかやなこも時間があるときに世話しにきてくれているのはありがたいと思っているで。でも、おじいちゃんの病状は悪化しているし、もう私は限界や。脳梗塞が再発したり、認知症の症状がこれ以上、進めばどうなるのか、不安でおしつぶされそうや。

孫（なこ）：いままで黙っていたんやけど、1年以上前かな、学校で、ACP（アドヴァンスケアプランニング）のことについて学んだ時、おじいちゃんに聴いたことあるねん。

娘（いちか）：なにを？

孫（なこ）：無理な治療をしないでほしい。痛みだけは押さえてほしいって。おじいちゃん、ずっとこの家を守ってきたやんか。住み慣れた家で最期を迎えたいって。

おばあさん（みお）：そんなこと、よう話ができたんやね。

孫（なこ）：死ぬことなんて、縁起でもないと思ってたけど、家で家族と話しあって、感想に書けと言う宿題やったし、将来、医療職に就くわけやから、興味をもたなければあかんと思って。

ホームヘルパー（ひまり）：実は私にもそんなことを言われていましたよ。今の症状では要介護度が進んでいると思うので、ケアマネージャーさんに相談し、在宅で利用できる制度を拡充できるのではないかと思いますよ。おじいさんの思いを尊重できますよ。

理学療法士（言語聴覚士）：そうですね。私も在宅療養に関わって10年になりますが、ご本人の意思を尊重される方向でのご家族が多いように思いますよ。

看護師：比嘉さんの思いを尊重していくことに決まりそうですね。おばあさん、いままで以上に医療・福祉の多職種連携チームを信頼し、任せてくださいよ。

在宅医（ひびき）：ご本人の意思を尊重していくことにしましょう。認知症の症状が進んでいますが、この結果を本人さんにも伝え、本人を支えていきましょう。



【想定していた活動成果に対する達成度合い（達成できたこと、できなかったこと等）、学生等が関わった地域、団体の活動の変化等・学生等の学習意欲、地域に対する考え方の変化等】

- ・全て楽しくさせていただいた。体操もすごくすっきりした。また参加したい。
- ・楽しく童心に返ったようにゲームをしたり、皆さんの心づかいがよく感じられた。
- ・生徒たちの頑張りに感謝。
- ・私たちのグループを取り上げてくれてありがとう。これからも一層みんなと一緒に頑張って作品作りをしたと思う。
- ・楽しかった。またこのような機会があれば参加したい。

イベントを通して地域交流を増やすべく、地域の高齢者に「コミュニケーションの場」を提供すること
 ↳このような“顔の見える関係づくり”を増やしていくことで、平時に限らず災害時の互近助へと繋げられる。

☆社会福祉協議会の方と連携して回覧板を活用した宣伝をおこなうこと

↳地域に密着した宣伝が可能となり、イベントだけでなく地域住民に活動を知ってもらうきっかけとなった。

高校生が地域コミュニティづくりに参画することで、高齢の方が自分らしく過ごすことができるような地域コミュニティへと繋げていくことができるのではないかと！

子どもの居場所作り

【活動内容・実績】

8月22日、「遊ぼう！学ぼう！小田夏祭り」を開催した。コロナ禍で退屈な日々を過ごしている子どもたちに楽しんでもらえるイベントを企画。子ども居場所作り班は、スーパーボール ヨーヨー ふよぶよ すくい 玉入れ ストラックアウト トートバッグを担当した。10月23日の地元のアミシング潮江商店街「楽市楽座」では、おかしづくりを実施した。今年は5月～6月に福祉課、青少年課の協力を得て、子ども食堂6箇所にインタビューに行き、食材の購入費用に困っているというのを聞き、10月にJR尼崎駅頭にて募金活動を実施し、75万円の募金を集めることができた。75万円は各子ども食堂に渡しに行き、大庄北の子ども食堂とは12月末に共催のイベントを実施した。また、関西国際大学の学生、商店街の空きスペースを使用しての多世代型居場所作りに取り組みはじめた。

【想定していた活動成果に対する達成度合い（達成できたこと、できなかったこと等）、学生等が関わった地域、団体の活動の変化等・学生等の学習意欲、地域に対する考え方の変化等】

小田夏祭りでは、トートバッグを子どもに親と飾りつけもらうことで会話が増えたり「考える」楽しさを知ってもらえ、地域コミュニティの輪も広げることができた。笑顔が増えた。

商店街でのお菓子作りでは「自分で作る」ことの楽しさや難しさを知ってもらえることができた。「災害時に簡単に作れるお菓子」があることを知ってもらえた。

募金活動では、協力してくださった方々の年齢層は広く、尼崎の暖かさを感じることができた。そして寄付することができ、間接的にも子ども食堂の活動に寄与することができた。

子ども食堂は「貧困の子供に食事を食べさせてあげるところ」ではない。家庭環境に関わらず、孤食を防ぎ、子どもだけでなく大人たちの多様な価値観に触れながら、「だんらん」を提供するところだと分かった。また、子どもが気軽に来ることができるようになれば、そこは「子ども食堂」になることも分かった。

高校生が動くことで、多くの大人がこの活動を支えてくれることが分かった。イベントにおいて、多くの子どもや保護者が参加してくれて、話もでき、繋がることのできたということに自信を持った。



- ・いざ何か起きた時、人との関わりが大切なので、「繋がり・出会い」をキーワードに今後も活動していきたい。
- ・子どもをめぐる現状について、まだまだ対応しきれず孤独感を感じている子はたくさんいると思う。しかし、今私たち高校生は大きく変えることはできない。だからこそ、子ども食堂を支援したり、イベントを地域の方と協力すると共に子どもたちの笑顔も増やしていきたい。

